

<書評>

山・水・人の風景—地質コンサルタントの世界

辻 和毅 著

自身の人生を生かしてきた仕事を通して総括する“自分史”を執筆しているとは聞き及んでいたが、三百頁に及ぶ力作を3冊目の著書として喜寿を前に完成させたことには敬意を表したい。これだけの高いレベルで纏め上げるには、これまでコツコツと学会誌や研究会誌に投稿してきた論文や調査報告書や現地写真および文章や著書等が多数あつてのことで、“継続と努力の積み重ねは力なり”と改めて感服した次第である。

章立て(序章)と書き出しが興味深い。一般に自分史のストーリーはクロノジカル(年代順)に書かれることが多いようだが、書き出しの第1,2,3章は、青年(九大)時代からの果しきれなかった夢(探検)を、生涯の仕事に一区切りがついた定年の直後にフォローアップするかたちでついに実現させたチベット・ヒマラヤ探検の記録・回想から始まる。

- ◎序章 章の組み立てと要旨
- ◎第1章 チベット・ヒマラヤの東 カンリガルポ山群と探検史
- ◎第2章 ミャンマーからブータンにかけての辺境地域
- ◎第3章 探検史の断章

第4,6章は、自分史の中核をなす仕事となった水(地下水)について書かれているが、日本では最古で最大大手の技術コンサルタントでアジア等の発展途上国の技術協力プロジェクトに長けた日本工営(株)における30年間(1973 - 2003年)と現在に至る(株)技術開発コンサルタントにおける実務経験を断片的に取り纏めている。

表題の地質コンサルタントの世界とは実質的に研究職と裏腹で、著者は技術士(応用理学部門、総合管理部門)の資格に加えて博士(工学)の学位を有しているが、自身の人生を支えた仕事の原点は地質学、すなわち九州大学・理学部・地質学科で10年間学んだことにあり、さらに青年期の探検にはせた初恋のような淡い思いが高度な仕事を続けながら半世紀にも亘り忘れることなく続いているようだ。何が人生をより豊かにしているのか?生活を支える仕事の世界だけでは大学から続く半世紀に及ぶ自分史を語りきれないのであることに思い至る。

九大の学生時代に海外に出た火山地質研究と探検部活動の鮮烈な記憶が挟まるように第5章に組み込まれている。今から五十年前の海外渡航が容易ではない学生時代に、韓国・済州島火山合同巡検にメンバーの代表として参加したある一夜における世代を超えた日韓歴史認識問題との遭遇とその後のトラウマの記憶は他人事ではなく日本人として深く考えさせられる。イングロ・カズオ氏のノーベル賞(2017)の受賞理由の根底にあるのは、過去の(不幸な)歴史にどう向き合うのか、何処まで遡って記憶していればよいのか、そしてどの時点で忘却できるのか、という国や個人を超える“忘却の問題”をテーマにした根源的な問い掛けであると理解している。彼は受賞記念講演でホロコースト(アウスビュッツ大虐殺)から衝撃をうけて日本と中国や韓国との歴史認識問題にも視点と論点を投影させて、文学が世界の平和問題に貢献できれば幸甚であると結んでいる。全編を通じて離島をテーマとした異色な第5章ではあるが、歴史を通じた“人の風景”の背景を戦後の平和構築問題にまで投影させるような文脈に強い関心を抱くと同時に、大陸と離れた島国に生きてきた日本人の一人として深く考えさせられるものがある。

- ◎第4章 東南アジアから南アジアへ—大都会と水の風景
- ◎第5章 大海の孤島に渡る
- ◎第6章 地下水と水資源の環境保全

第7,8章と終章は、自分史を振り返って人生の歴史の断片から未来(若い友)に眼を向ける終章につながる補遺に相当している部分と思われ、大学・大学院→地質コンサルタント→大学教員(客員教授)まで関連性を保ちながら人との出会いと縁があつて展開していった人生の流の文脈が、興味深くもあり味わい深い。

自分史のなかで、“邂逅”=人との出会い⇔“人の風景”を欠かすことは出来ないであろう。幾多とある邂

逅のなかで、「四万十」と「大学⇔研究⇔仕事」を結んだ、九大・地質学教室の先輩でもあり日本を代表する地質学者として後世に名を残した故・勘米良 亀齢(1923 - 2009 年)教授との筆者ならではの出会いが第7章に書かれている。九州大学(当時九州帝国大学)は1910年(明治43)に設置され、翌1911年工科大学(後の工学部)が発足してその中に採鉱学第二講座が設置された直後の1912年に応用地質学講座が新設され、工学に密接に関連した地質学の研究と教育に力が注がれた。1939年に理学部の開設とともに地質学教室が発足し、勘米良教授は初期の卒業生であり直系で教授に就任した一人である。

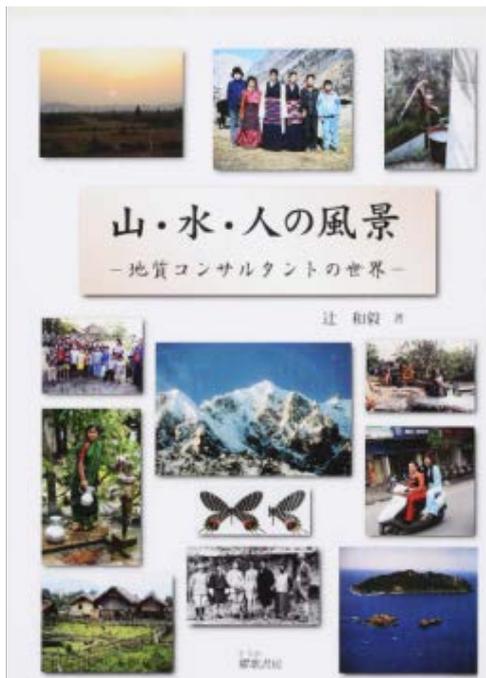
勘米良・教授は、造山帯の形成場に関して、「四万十帯のような地層と現在の海洋や大陸で起こっている現象の対応を見つけなければならない」と考え、宮崎県の王ヶ瀬川・耳川地域の現地調査研究に集中し、1975年にGDP(球ダイナミクス計画)連絡誌に日本で最初の「付加体モデル」を提唱した。従来は古生界であった地層がすべて中生界に塗り替えられ、そのほとんどが付加体の概念で説明できることが明らかになり、プレートテクトニクス理論を示唆する「付加体モデル」は、日本列島の地質学の常識(地向斜造山説)を根底から覆してしまった。

著者が敬愛する先輩との邂逅は、九大卒業後に地質コンサルタントのなかで石灰岩地帯の貯水ダム建設の問題に取り組む過程において、恩師の勘米良・名誉教授に相談して”付加体”の解説を受けたことに始まる。日本の石灰岩地帯は太平洋南方の海洋プレートが北上して日本海溝で大陸プレートの下に沈み込む際に、海洋プレートの上の堆積物がはぎ取られ、陸側に付加したもので、海水面変動が伴う浅い海洋ではサンゴ礁が厚く堆積して付加体の供給源の一部となっている。この概念によって日本列島を形成する海洋起源の石灰岩を含む堆積岩や変成岩について、系統的な説明ができるようになったことを著者より享受され、ダイナミックな地質学(プレートテクトニクス理論)の真髄に始めて眼が開いたことを鮮明に記憶している。後に著者が四万十層群の模式地ともなっている高知(工科大学)に赴任した際に、著者が勘米良・名誉教授から受けた新しい知見を引き継ぎながら発展させることができ、四万十・流域圏学会の理事として10年間を共に学びながら過ごすことが出来たのも何かのご縁(=邂逅)の”ひとこま”なのかもしれない。

- ◎第7章 邂逅のひとこま―人生の妙
- ◎第8章 郷土の情景
- ◎終章 若き友へのメッセージ

“あとがき”で、当初はあちこちに書いた雑文を整理しようと軽い気持ちで思い立ったが、だんだんと”おおごと”になってきましたと述べているが、これだけの大作を執筆する高いレベルの文章力に加えて、見事な技量が際立つ現地カラー写真が各所にふんだんに組み込まれおり、チベット・ヒマラヤから始まる山・水・人の“風景”にだんだんと引き込まれていく、流石です。40年間に亘る生涯の仕事を通じての敬愛する先輩の299頁に及ぶ力作で、初版直後に一読させていただきましたが、「終作」ではなく「秀作」と思います。

村上 雅博 (高知工科大学・名誉教授)



山・水・人の風景—地質コンサルタントの世界
辻 和毅 著 権歌書房 (2019年5月1日) 299頁
ISBN-10 : 4434254502 ISBN-13 : 9784434254505

参考資料 :

松本達郎 (1984) 九州大学地質学教室及び関係部門の初期の歴史 地学雑誌 Vol.93, No.4, pp.46-57
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgeography1889/93/4/93_4_236/_pdf]

西弘嗣, 酒井治孝 (2009) 勘米良亀齡先生のご逝去を悼む 日本古生物学会 (PSJ) NII-Electronic Library Service, pp.89-90, 2009.10
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/kaseki/86/0/86_KJ00005821697/_pdf/-char/ja]

(原稿受付 2019年7月2日)